

風の輪

福祉の心

水仙福祉会
理事長 松村 寛

今年7月の新聞紙上で、安

倍総理がハンセン病患者の家族に対し、心から謝罪するという記事がありました。それは1897年（明治30年）に法律がつけられ、以来ハンセン病と診断された人は強制的に収容施設に隔離され、社会と絶縁されたことでした。そして家族は、世間からの非難や差別を恐れて、家族にハンセン病患者が居ることを隠して過ごしてきました。

第二次世界大戦が済み、しばらくしてハンセン病の治療がすすみ、完治されるようになりました。しかし国は、1996年（平成8年）になって、この法律を廃止し、ハンセン病対策の誤りをやっと認めるという、ほぼ100年も放置してきたのです。この間の患者本人や家族の苦しみは、言葉に表せない残酷なも

のだったことと言えます。

しかし、この忌み嫌われたハンセン病患者のために、自らの生涯を捧げ支援した人もまた多数居りました。その一人、井深八重（いぶかやえさ）さんは、1918年（大正7年）同志社女学校英文科を出て、長崎県立高等女学校の英語の先生として赴任しました。ところが、翌年にハンセン病の疑いと診断され、神奈川県にある山の中の隔離病院に強制的に入院させられました。

だがその後、1922年（大正11年）に精密検査を受けたところ、ハンセン病であることは誤診だったことがわかり、院長は井深さんに退所を勧めました。しかし井深さんは、入所中の患者さんたちの境遇や、院長等の献身的な活動に触れたことから、この恩に報いらねばと思ひ、看護

婦の資格を取得し、26歳で看護婦長となり、生涯を患者と過ごしたと言われて

います。

この井深さんの人生が、ある著名な社会事業家の目に止まり、この人の生き方こそ社会福祉を行なうもの「福祉の心」だと広く提起されました。それが今でも日本の社会福祉を实践する人たちにとって、尊敬の語り草になっています。

戦前の社会事業家には、このような個を殺して他に献げ

るといふ無私の行為がたくさん見られました。残念ながら、今では利己的な社会の反映からか、社会福祉を仕事とする人も、この「福祉の心」を持たない人がたくさん居ります。

それは、多くが理屈だけで仕事をするとという変わり方だと言えます。

そこに困った人がいたら、何を差しおいても支援するというのが、社会福祉に従事する人の心がまえであります。その「福祉の心」とでもいう理念を、若い人たちに伝えていくのが、私たちの使命でもあると思っております。

第49回毎日社会福祉顕彰 水仙福祉会が表彰される



表彰盾授与の様子

福祉の向上に尽くした個人・団体を顕彰する第49回毎日社会福祉顕彰に水仙福祉会が選ばれ、10月25日に東京都千代田区のパレスサイドビルで行なわれた贈呈式に、松村寛理事長が出席した。（2面に関連記事）